

# 763年の吐蕃による長安陥落の再検討

任 小波  
河野 剛彦 訳

西暦755年（天宝14年）、唐朝では安史の乱が勃発し、その国力は大きな打撃を受けた。唐は安史の乱鎮圧のため西方の精鋭部隊を東に移動させ、吐蕃はこれに乗じて河西・隴右地方に侵入した。758年（乾元元年）、吐蕃は大規模な東進を開始し、鳳翔（陝西省鳳翔）以西と邠州（陝西省彬県）以北は吐蕃の支配下となり、唐朝はその西北の地をほぼ失った。763年（広徳元年）には、尚野息（Zhang rGyal gzigs）・恩蘭・達札路恭（Ngan lam sTag sgra klu khong）が20万の大軍を率いて関隴地方を突破し、長安（陝西省西安）に至った。唐の代宗は陝州（河南省陝州）に逃れた。吐蕃軍は長安を陥落させ、広武王李承宏を立てて皇帝とし、15日後に撤兵した。吐蕃はこの戦役を記念するため「雪碑」（Zhol rdo ring phyi ma）を設立し、これはラサのポタラ宮の山下に現在も残されている。この戦役は、吐蕃と唐朝の長期にわたる戦いの中で最大のものであり、歴史的イベントでもあった。関連文献の記載によってこの戦役の背景と結末はほぼ明らかになっている。中でも、佐藤長氏による詳細な研究は、この戦役に関する研究の集大成と言える<sup>[1]</sup>。筆者はこの戦役に関する先行研究で十分に言及されていない点について、チベット文と漢文資料を結合し、吐蕃の部落兵制と帝国体制に着眼した。そして、「馬重英」・「立新君」という二つのテーマを通じて、吐蕃軍事－政治機構と体系におけるこの戦役の位置づけを行いたい。

## 1. 「馬重英」新解——吐蕃部落兵制

漢文資料には、長安を陥落させた吐蕃の将の1人として「馬重英」の名が見える。この名は漢族風の名前だが、李方桂氏はチベット文と漢文史料の対比によって、吐蕃の墀松徳贊（Khri srong lde btsan 在位755～797年）の時期の名臣である恩蘭・達札路恭（Ngan lam sTag sgra klu khong）と「馬重英」の事績が一致することを発見し、二者が同一人物であることを示した<sup>[2]</sup>。763年に馬重英は兵を率いて長安に入り、広武王を傀儡の皇帝として擁立

した。このことは「雪碑」に記される恩蘭・達札路恭の事跡と一致する<sup>[3]</sup>。sTag sgra klu khong/gong という名は、チベット文史籍では sTag ra klu gong, Ta ra klu gong と記される。その内の sTag sgra という語（虎嘯の訳語）は、漢文史籍では「悉諾邏」と音訳される。恩蘭（Ngan lam, = Ngam）一族についても、于闐地区の出自とする説<sup>[4]</sup>、出自を羌姓「夫蒙（後に馬姓に改姓）」と推測する説<sup>[5]</sup>、また西域の安氏を出自とする説がある<sup>[6]</sup>。佐藤長氏は、馬重英という名から吐蕃の将軍に漢族風の名を用いる風潮があったことを指摘されている。しかし、これらの推測はどれも具体的な根拠を示していない。敦煌文書 PT1288+ITJ750 号『吐蕃大事紀年』第 86 行には、701 年に贊普の母である墀瑪蕾（Khri ma lod）が新恩蘭園（Ngan lam tsal sar pa）にいたとあり、恩蘭一族の居住地が現在のラサ近辺であったことがわかる。『雪碑』北面第 16 行にも、恩蘭一族が「常侍于贊普駐牧之地」（tshal zar (mtsher sar) rtag du mchis pa）とあることから、恩蘭一族がラサ周辺に居住していたことがうかがえる。

755 年、吐蕃の大相末・東則（'Bal lDong tsab）・大論朗・迈色（Lang Myes zigs）による墀德祖贊（Khri lde gtsug btsan, 704-755 年在位）の毒殺を契機として引き起こされた内乱は、吐蕃の政教上に極めて大きな混乱をもたらした。恩蘭・達札路恭は末氏・朗氏の罪を摘発したことによって、新君である墀松德贊に重用された。『雪碑』南面第 1-20 行にはこの事件に関する詳細な記述がある。ある臣下が反逆の罪を問われ、その罪を摘発した者が権力を得るということは、吐蕃史上に良く見られることである。チベット文の史籍によると、恩蘭・達札路恭は苯教を信奉し、仏教に反対したために北方に遷され、回鶻へ出征した。その後、唐への侵攻に起用されることとなり、763 年の吐蕃による長安陥落の総指揮官に任じられた。「仏苯の諍」の時には苯教を支持し、「頓漸の諍」の時には禅宗を支持していることは、贊普王権を支持する意識の現れと言える。779 年の桑耶寺（bSam yas）興仏証盟『第一招書』（bKa'gtsigs dang po）に記録される王臣名位では、恩蘭・達札路恭が九大「尚論平章政事」（zhang blon chen po bka'la gtogs pa）の次席となっている。興味深いのは桑耶寺が苯教風の黒塔をその名の由来としている点である。以上のことから、恩蘭・達札路恭は吐蕃王権が弾圧しようとした苯教勢力の代表的人物であったが、その軍事的才能から贊普は彼を用いざるを得なかったことがわかる。

吐蕃帝国は、中翼（dBu ru）・左翼（g Yo ru）・右翼（g Yas ru）・支翼（Ru lag）の四つに分かれている。各翼が十の千戸を管轄しており、さらにそれぞれが一つの「御林千戸」（sKu srungs gi stong sde, = sKu 'khor stong sde）を有し、東・北・西・南の四部に分居している。これが「御林四部」（sku bsrung sde bzhi）である。恩蘭一族の管轄する彭域千戸（'Phan yul stong sde）は、吐蕃王室の御林親軍の一つである。彭域は彭波（'Phan po）とも

称され、もとの名は岩波 (Nga po) といい、ラサの北方の年曲 (Nga chu) 河谷に位置している。『雪碑』北面第 38-50 行の記載に、

blon stag sgra klu khong gi pha zla (\*stag) gong gi bu tsha rgyud 'pheld gyi rnam zhang  
lon yi ge pa'i thang dang / dmag sum rgyar gnang ngo /// sku srungs 'phan yul pa'i stong  
dpon du gzhan su yang myi gzhug par blon stag sgra klu khong gi myes po gsas slebs gyi  
bu tsha rgyud peld las gang rngo thogs pa' / dmangs 'drang ba gcig / sku srungs 'phan  
yul pa'i stong dpon g.yung drung du stsald par gnang ngo /// ngan lam gsas slebs gyi bu  
tsha rgyud 'pheld / nam zhar gyang sde sku srungs su gnang ba las / sde cha gudu myi  
spo' myi bsgyur bar gnang bo

論達札路恭之父・達恭之子孫后代，授予尚論長史權銜，准其領有三百軍丁。御林彭域千戸長之職，永不授予他人。論達札路恭之祖，悉腊之子孫后代，凡具才干且公正臨民者，委以御林彭域千戸長之職，作為世勳永業。恩蘭・悉腊之子孫后代，恩令永為御林部曲，職守决不遷變更移。

とあり、その方位から、この「御林彭域千戸」(sKu srungs 'phan yul pa) が「御林東部千戸」(sKu srungs shar phyogs pa) であることがわかる。吐蕃中翼の「十六境域」(yul gru bcu drug) の中に、恩蘭 (Nga lam) ・彭域 ('Phan yul) の二つの地があり、彭域千戸は吐蕃の「十八采邑」(khol yul bco bgyad) の一つで、系卓氏 (sGro) ・馬氏 (rMa, < \*rMa bya 「孔雀」の訳) の一族の所属地である。『喻法宝聚』によれば、彭域には「恰城」(Phya mkhar) という軍事要塞があり、卓氏・馬氏の統治下にあったとある。これは後代の記録ではあるが注目に値する。

「馬重英」の名義と音については、吐蕃本部と東方国境との軍事体制問題に関わりがある。『雪碑』南面碑文の主題は、つまるところ恩蘭・達札路恭の「忠定不二，饒益社稷」(第 40-41, 72-73 行 : glo ba nye zhing chab srid la dpend pa) の業績を顕彰したものである。とりわけ、兵を率いて唐に侵入し長安を陥落させたことについては、明快かつ詳細な記述がある。これと同一の内容が、敦煌文書 Or 1812.187 号『吐蕃大事紀年』第 12-16 行に記載されており、

[lug gi lo la babste /] yab gyi khor pha dag dmag myis phab / stong sar stong sde gsum  
gyi stong dpon bskos / lang 'bal gyi bran spyugste / mtong sod du bton / blon khri bzang  
dang / zhang stong rtsan gnyis gyis / mkhar te'u cu phab / rma grom phyir btsugste /

zhang mdo bzher rma grom gyi dmag dpon du bka' stsald / mdo smad gyi dbyar 'dun dbu  
le lam nag du / blon khri sgra dang mang rtsan 'pan gang dang / blon mdo bzher las  
stsogs phas bsduste / te'u cur dra ma drangste / dgun 'dun zhang rgyal zigs gyis / rag  
tagi kog du bsduste / lang 'bal bkyon pab pe'i (dpe'i) nor brtsis pa— /

及至羊年（七五五年），發兵捉獲〔謀害〕父王（墀德祖贊）之近侍。任命悉董薩三个千戸部落之千戸長。放逐朗氏・末氏之奴戸，驅至東索。論墀桑・尚東贊二將，拔洮州城。新建馬氏軍鎮，敕授尚多熱為馬氏軍鎮元帥。多麥夏季會議，由論墀札，莽贊彭岡・論多熱等人召集于伍列蘭那。引勁旅至洮州。冬季會議，由尚野息召集于惹達之廓〔州〕，清点遭罪遣者朗氏・末氏之財物。

その中の *phyir btsugs* という一語について，筆者は「新建」・「別置」と解釈した。この語については，従来は「回復」(restored)・「重建」(re-established) という解釈が定説だったが，こうした解釈では吐蕃特有の軍事体制を説明することは出来ない<sup>[7,8]</sup>。また，敦煌文書 PT 1288 + ITJ 750 号『吐蕃大事紀年』第 229 行によれば，738 年（開元 26 年）に吐蕃の軍隊が「收復馬氏堡寨」(*skun kar (sku mkhar) rma tshe slar thob pa— /*) したとある。その中の *slar thob* という言葉は，「收復」・「重獲」という意味である。この *rMa tshe*（馬氏堡寨）には，*rMa grom* の本部が存在していた。「新建馬氏軍鎮」・「敕授軍鎮元帥」とは，吐蕃本部に属する部落に編成されていた *rMa grom* (= *rMa khrom*, 馬氏軍鎮) の兵員を東方国境に移し，新たな占領区を中心として同名の軍鎮を設置したと考えられる。王堯氏はこの資料によって，「馬重英」が *rMa grom* (= *rMa khrom*) の音訳であるとはじめに推測された<sup>[9]</sup>。この説は非常に興味深いもので，さらに説明を行いたい。

敦煌文書 PT 1288 + ITJ 750 & Or 1812.187 号『吐蕃大事紀年』によれば，704 年墀都松 (*Khri 'dus srong*, 676-704 年在位) が *rMa grom* の *Yo ti cu bzangs* に居住しており，この地は吐蕃本部に位置する。707 年，759 年に多麥 (*mDo smad*) 軍政會議が *Rag tag* の *rMa rong*（「馬川」の訳）で二度召集された。この地は吐蕃の東境にある。PT1287 号『吐蕃贊普伝記』の第 531-532 行に，699 年（聖曆 2 年）吐蕃の噶氏 (*mGar*) 一族が唐に帰順した際，吐蕃にはすでに「馬氏宮堡」(*rMa 'i pong bra*, < *rMa 'i pho brang*) が存在していた。黄布凡氏は *rMa grom* の所在について，現在のラサ市堆龍徳慶県の馬区 (*dMar*, < \**rMa*) と推定され，ここが吐蕃の本部であったとされる<sup>[10]</sup>。吐蕃の東境の *rMa grom* の所在については，明確な資料がある。敦煌文書 PT 1082 号『回鶻聖天可汗告牒』（932-934 年）第 9-10 行には *Gog chu rMa grom* の名があり，その中の *rMa grom* の一語は，敦煌文書 PT 1089 号『吐蕃職官表状』や 5 世・7 世噶瑪巴 (*Karma pa*) の遊記にも見ることができる。後世のチ

ベット文史籍にも、'Go log Ma khrom, mGo log sMra chu のような記述がある。石泰安氏は rMa grom の位置を黄河上流地区の廓州 (Gog chu, = Kog chu), 果洛 (mGo log, <'Go log) の地に推定されている<sup>[11]</sup>。石川巖氏は吐蕃の rMa grom と黄河上流の rMa grom の差異について言及されているが、具体的な考察はされていない<sup>[12]</sup>。

760年から770年代にかけて、吐蕃の「三尚一論」、4人の名将である尚結息贊磨 (Zhang rGyal zigs btsan ba), 尚東贊 (Zhang sTong rtsan), 尚野息舒通 (Zhang rGyal zigs shu theng), 馬重英 (論達札路恭) が連年唐に侵攻した。チベット文献から、763年の吐蕃による長安陥落もこの4人に統率されたものだったことがわかる。漢文史籍によれば、765年 (永泰元年) 9月に唐将の僕固懷恩が「僕固懷恩誘吐蕃, 回鶻之衆, 南犯王畿」したとあり、また吐蕃の将尚野息 (「尚結息」とも記される)・尚東贊 (「尚悉東贊」とも記される)・尚贊磨・馬重英が20万 (「10万」とも記される) の軍を率いて、「寇奉天・醴泉等県, 大掠居人, 男女数万計, 焚廬舍而去」というような略奪を行っている<sup>[13]</sup>。その後郭子儀が回鶻と盟を結んで、吐蕃の軍を大破した。774年 (大暦9年) に、郭子儀が上奏した『論吐蕃書』には、

今吐蕃充斥, 勢強十倍。兼河・隴之地, 雜羌・渾之衆, 每歲来窺近郊。以朔方減十倍之軍, 当吐蕃加十倍之騎。欲求制勝, 豈易為力? 入近内地, 称四節度, 每将盈万, 每賊兼乘数四。臣所統將士, 不当賊四分之一。所有征馬, 不当賊百分之二。誠合固守, 不宜与戰!

とある。その中に「入近内地, 称四節度」という記述があり、これは吐蕃が東進した際の軍事制度を表すものと考えられる<sup>[14]</sup>。李方桂氏は馬重英を吐蕃の「四節度」の一つとされており、前述の rMa khrom (馬氏軍鎮) とも符合する<sup>[15]</sup>。「每将盈万, 每賊兼乘数四」とは、「1人の将が騎兵1万を統率し、騎兵1人に騎馬4頭が配備された」という意味であり、吐蕃節度の兵力を表している。「每将盈万」については、吐蕃軍の Khri dpon (万户長) という職としても記されている。778年 (大暦13年), 馬重英は4万騎で靈州 (寧夏靈武) に来寇し、朔方軍の抵抗に遇い、塩 (陝西定辺)・慶 (甘肅慶陽) を残して引き上げた。その後、南行して南詔の軍20万と合流して、劍南道北部を侵犯した<sup>[16]</sup>。このように、吐蕃の兵力構成と行軍方式の概況を推測することができる。

763年に吐蕃が長安を陥落させた後、吐蕃の諸将はみな告身 (yi ge) を褒章として授与された。これは吐蕃の軍が戦功を賞する慣用的な制度である。敦煌文書 PT 1287号『吐蕃贊普伝記』第376-378行によれば、この戦役の褒章は「王臣議定」(rje blon mol te) とされている。敦煌文書 Or 8212.187号『吐蕃大事紀年』第56-61行には、



[yos bu'i lo la babste /] – // bod yul du mol cen (chen) / <mol cen> mdzade /// zhang lon (blon) chen pho spo bleg mdzade // – // zhang rgyal zigs <chen pho> g.yu'i yi ge stsalde / mgar 'dzi / rmun gyi thang du chog shesu bstod // – // [zhang] stong rtsan g.yu'i yi ge / stsal te / so mtha (myha') bzhi dmag pon du bka' stsalde // pa– //

及至兔年（763年），……。于蕃地行議政大会，对大尚論予以晋封。……。賜予尚野息瑜石告身，褒以与噶・孜門相埒之權益。……。賜予尚東贊瑜石告身，授以四境戍辺元帥之職事。

とある。『雪碑』東面・北面の碑文によれば、墀松徳贊はこの盟誓詔書で、恩蘭・達札路恭に「囊論」（Nang blon chen po）及び「整事大相」（Yo gal 'chos pa chen po）の職を授与されており、恩蘭一族は助爵（dku rgyal）を賜り、采邑（khol yul）を加増された。権勢や恩寵は恩蘭の氏族にまで及んでいる。「王臣議定」という言葉は、吐蕃の『第穆薩（De mo sa）摩崖刻石』（798-815年）第20-21行、『諧拉康（Zhwali lha kang）乙碑』（812年）第20行に見ることができる。この二つの碑文は、贊普によって邦伯（rgyal phran）・僧相（chos blon）に封じる際の盟誓詔書に分類され、そのほとんどが「議政大会」（mol cen）で定められた。

以上の内容をまとめると、「馬重英」とは黄河上流から東進して長安を陥落させた吐蕃の軍鎮である rMa grom の音訳であることがわかる。恩蘭・達札路恭は漢文史籍中で「馬重英」と記されることもあり、それは恩蘭・達札路恭が就いていた彭域千戸長（'Phan yul stong dpon, = \*rMa grom stong dpon）の職によるものと考えられる。チベット文史籍では、Ma zhang khrom/grom pa skyes/skyabs は常に恩蘭・達札路恭と一緒に記され、2人は吐蕃の親苯教反仏教的立場の代表人物であった。Ma zhang の名は吐蕃期のチベット文献には見られず、馬氏（Ma）は「尚」（Zhang, 舅臣）と称されている。そのため Ma zhang を恩蘭・達札路恭自身とする説<sup>[17]</sup>、Ma zhang が吐蕃外戚集団の別称とする説がある<sup>[18]</sup>。しかし、チベット文史籍では Ma zhang を Zhang Ma zhang と称するのは珍しいことではなく、その人物が尚族もしくは出自が尚族であることを示すという点は指摘しておきたい。『巴協』には、Zhang Ma zhang が仏教を信奉していた朗氏（Mang, Lang?）・末氏（Bal, <'Bal, 蘇毗王族）の処罰を主導したとあり、これは『雪碑』南面碑文や『吐蕃大事紀年』の対応する記載と合致する<sup>[19]</sup>。また『巴協』（別本）や『五部遺教』では、Ma zhang 那囊氏（sNa nam）と記される<sup>[20]</sup>。那囊氏は吐蕃四大尚族に連なるものであり、ゆえに Ma zhang は sNa nam zhang Ma zhang とともに称される。したがって、Ma zhang と rMa grom が無関係であるこ

とが分かる。

## 2. 「立新君」再検討 吐蕃帝国体制の視点より

戦争を通じて財物を奪い、歳賦を獲得するのは吐蕃の軍事征服の特徴であり、吐蕃部落兵制の士気向上の方法であった。漢文史籍には「兵法嚴，而師無饋糧，以鹵（擄）獲為資」とある<sup>[21]</sup>。敦煌文書 PT 1287 号『吐蕃贊普伝記』第 341-343 行によれば、墀徳祖贊の時に吐蕃は瓜州（Kwa cu）を陥落させ、贊普と臣下は多くの財物（dkor mang po）を略奪し、庶民はみな上質の唐の絹（rgya dar bzang po）を手に入れた。唐は肅宗朝に入ると反乱平定に集中するため、吐蕃に対して割地納賦政策をとった。この間吐蕃は唐との国境地帯である河西九曲の地を占有した。『雪碑』南面の碑文第 46-48 行には、吐蕃の攻勢に直面した唐の対応として、「唐王孝感皇帝君臣大怖，年貢絹繪五万匹以為寿」（rgya rje he'u 'gi wang te rje blon skrag ste / lo cig cing rtag du dpya dar yug lnga khri phul te /）という記述があるが、漢文史籍ではこの件についてほとんど言及されていない。佐藤長氏はこれが 762 年（宝応元年）の唐—吐蕃会盟の取り決めであるとされており、史実とも符合する<sup>[22]</sup>。756 年（至徳元年）以降、墀松徳贊は数回にわたり唐に使者を派遣して講和を求め、同時に安史の乱の反乱軍討伐に協力を申し出た。762 年に吐蕃は使者を派遣して和平を求めた。肅宗は「雖審其譎，姑務紓患」として、宰相郭子儀らに命じて中書省で宴を設け、鴻臚寺で会盟した<sup>[23]</sup>。唐による吐蕃への納賦はここで定められた。代宗期になると唐は 762 年の吐蕃との盟約の履行を拒絶した。そのため吐蕃は懲罰的な軍事行動により、かねてからの東進の目標実現を決意した。『雪碑』南面第 53-55 行には恩蘭・達札路恭が「首倡興兵入唐，深取京師之議」（rgya yul gyi thild / rgya rje'i pho brang keng shir / bod gyis dmag drang ba'i bka' gros gyi mgo chen po gsold - /）したとあり、戦火は唐の心臓部におよんだ。この戦役に関する漢文史籍の記録としては、『資治通鑑』巻 223，唐紀，広徳元年 7 月至 12 月条下が最も詳しい。チベット文献には漢文史籍より多くの記述が見られる。敦煌文書 Or 8212.187 号『吐蕃大事紀年』第 45-55 行には、

stagi lo la babste / - /// mdo smad gyi dgun 'dun / gtser blon khri sgra stag tshab gyis /  
bsdus / rgya'i dpya dar / so phyogsu / stong dpon yan cad bya sgar (dgar) stsald ///  
dgun smad rgya rje nongs nas // rgya rje gsar du bcug pa // dbya' dar dang sa ris las  
stsogs pa 'bul du ma rung nas // chab srid zhig nas zhang rgyal zigs dang zhang stong rt-  
san las stsogs / pas / bum ling lcag zam rgal te // dra cen (chen) drang ste / 'bu shing

kun dang zin cu dang ga cu las stsogs pa / rgya'i mkhar mang pho phab ste / zhang rgyal zigs slar bod yul / du / mchims te / zhang rgyal zigs // dang / blon stag sgra dang stong rtsan dang zhang / btsan ba las stsogs pas / keng shir dra ma drangste ke [ng] shi phab // rgya rje bros // nas / rgya rje gsar du bcug / nas / dra ma / slar log nas // zhang rgyal zigs bod yul du mol cen la / mchis / pa— /

及至虎年（762年），……。多麦冬季會議，由論墀札達策召集于孜地，以唐廷所論絹帛，賞賜辺地千戸長以上官吏。冬末，唐帝崩，新君立，以為再輸絹帛・土地不宜，〔蕃唐〕社稷失和。尚野息・尚東贊諸將，越鳳林鉄橋，引勁旅陷武勝軍（甘肅臨洮）・秦州・河州等地，拔唐之城壘多處。尚野息旋返蕃土。尚野息・論達札（路恭）・尚東贊・尚贊磨諸將，引勁旅至京師，京師陷，唐帝遁走，乃立新君，勁旅還。尚野息旋返蕃土，召集議政大会。

とあり，この記述は『雪碑』南面碑文の抄本と考えられる。その中の 'Bu shing kun とは武勝軍を指し，臨洮の地にあった。後世の文献の多くは Shing kun（「盛棍」と音訳される）を臨洮と訳しており，'Bu shing kun の首音が脱落している<sup>[24]</sup>。当時の唐の軍紀が弛緩していたことや，長安が容易に陥落したことは，吐蕃の贊普や将帥にとっても予想外のことだったのではないか。王忠先生は「吐蕃が長安へ入ることができたのは偶然のチャンスによるもの」とされており，筆者と同様の考察をされている<sup>[25]</sup>。吐蕃による長安進駐後のこととして，「剽掠府庫市里，焚閭舍，長安中蕭然一空」という記述があるように，この戦役を通じて長安城が災禍に巻き込まれたことがわかる<sup>[26]</sup>。

唐との争乱において，吐蕃の重臣は国外では將軍であり，国内では大臣であるという伝統がある。『雪碑』東面碑文では，恩蘭・達札路恭を特に強調して「饒益于内外政事」（第9-11行：phyi nang gnyig kyi chab srid khab so dpend pa— /）とある。漢文資料では恩蘭・達札路恭を「大酋」・「大将」・「宰相」と称しており，その身分は重臣が外部では武官，内部では文官という吐蕃の性質と合致する。大相に任じられたのはこの戦役後であるが，広徳年間には宰相の身分を有している。『雪碑』南面碑文によれば，755年～763年にかけて，恩蘭・達札路恭は吐蕃の「涼州道行軍元帥」（Khar tsan phyogs su thog ma drangs pa'i dmag dpon）に，763年には「京師道行軍元帥」（Keng shir drang ba'i dmag dpon chen pho）に任じられている。こうした称号は唐の典籍にあるものと類似する。敦煌文書 Or 8212.187号『吐蕃大事紀年』第33行には，758年に吐蕃が唐の Khar tsan Leng cu の地に出兵したとある。Khar tsan Leng cu という語については，李方桂氏が朔方節度使の駐屯地である靈州に比定されている<sup>[27]</sup>。しかし，吐蕃の文献を見ると Khar tsan Leng cu は河西節度使の駐屯地



である涼州（甘肅省武威）を指していることがわかる<sup>[28]</sup>。Khar tsan Leng cu とは「姑臧涼州」なのである。このように、吐蕃の最初の目標は唐の河西節度使の駐屯地である涼州（甘肅省武威）攻略であり、この目標は764年に実現することになる。

吐蕃の軍隊の構成を見ると、吐蕃帝国統治下の吐谷渾・党項・氐・羌等の部落の兵員が多数編入されている。吐蕃の行軍進路は、おおまかに見て涇水・渭水に沿って東進するものであった。この期間、吐蕃と唐は2回**蓋屋**（陝西省周至）一帯で戦っている。

吐蕃帥吐谷渾・党項・氐，羌二十余万衆，弥漫数十里，已自司竹園渡渭，循山而東。……癸酉，渭北行營兵馬使呂月（日）將將精卒二千，破吐蕃于**蓋屋**之西。乙亥，吐蕃寇**蓋屋**，月（日）將復与力戰，兵尽，為虜所擒<sup>[29]</sup>。

また『冊府元龜』には、吐蕃「深入京畿，掠奉天・武功，濟渭而南，緣山而東」とある<sup>[30]</sup>。この「循山而東」・「緣山而東」とは終南山（秦峰）に沿って東進したことを指している。

「**蓋屋**大戦」とは『雪碑』南面碑文第59-61行に記される「**蓋屋**渡口」（Ci'u cir gyi rab ngogs）の戦いであり、吐蕃が長安へ進軍する中で遭遇した最も頑強な抵抗だった。**蓋屋**での戦い以降、吐蕃は唐に一気に侵入した。「司竹園」は司竹監に属し、「掌植養園竹之事」とある<sup>[31]</sup>。前述の「**蓋屋**渡口」とは龍光渡であり、司竹園一帯にある。唐代から元代に至るまで、関中地区に司竹監が設置された。当時の長安城の南には竹林が広がっており、現在も周至地区には古くからの竹林が分布している。

吐蕃による長安占拠は、その東方進出の頂点でもあった。唐の敗因については、『資治通鑑』巻223，唐紀，広徳元年に引かれる太常博士柳伉の上奏が最も痛切である。

吐蕃の「無血入城」の要因は、唐の軍備の弛緩・兵力の分散であるが、代宗の功臣への猜疑心や宦官の重用によって、士気の低下を招き、戦局を見誤らせた点も指摘できる。これに対して吐蕃の「留京師十五日乃走」の要因としては、吐蕃軍が長安の水や土地になじめなかったとする説がある。漢文史料を検索すると、吐蕃軍は2度長安に入っており、1度は763年の武力侵入、もう1度は784年（興元元年）の援軍としての出兵である。『旧唐書』の吐蕃伝には「吐蕃の来寇は、秋冬がほとんどであり、春になると多くは疾疫によって引き上げる」とある。

784年、朱泚の乱が勃発すると吐蕃の大相尚結贊は唐への援軍を計画した。4月、吐蕃軍は唐軍と共に朱泚の兵を武亭川（陝西省武功）で打ち破り、その後に略奪を行って引き上げた。『新唐書』吐蕃伝には、「初，与虜約，得長安，以涇・靈四州畏之」とある<sup>[32]</sup>。この時は既に初夏であり、「旋属炎蒸，又多疾疫，大蕃兵馬，便自抽歸，既未至京，有乖始望」と

いう記述がある<sup>[33]</sup>。763年の吐蕃による長安陥落もまさに10月のことであり、「秋冬入寇」という戦争周期に符合する。このことから、水や土地になじめなかったとする説は根拠に乏しい。漢文史籍の記述では、吐蕃は最終的に長安から撤収することになるが、敵国で孤立し周囲の状況に詳しくなかったことがその要因である。唐軍は藍田から北進して攻撃を仕掛け、吐蕃は慌てて長安から脱出した。吐蕃は再度鳳翔を攻囲したが、唐軍の籠城に遭い挟撃を受けることになり、原（寧夏回族自治区固原）・会（甘肅省靖遠）・成（甘肅省礼県）・渭（甘肅省隴西）等の地から退去した。

注目されるのは、吐蕃は長安を占拠した後、邠王李守礼の子（『冊府元龜』・『資治通鑑』は「孫」に作るが誤りである）である広武王の李承宏を立てて皇帝とし、「改元」・「擅作敕令」・「署置官員」したとあり、翰林学士于可封や司封霍瓌等を宰相とした<sup>[34]</sup>。敦煌文書PT 1287号『吐蕃贊普伝記』第376-378行・『雪碑』南面第67-68行によれば、広武王（Gwang bu hwang te, 広武皇帝）は710年（景龍4年）に吐蕃に降嫁した金城公主の兄であり、吐蕃が唐朝の政情に通じており、投降した将兵の協力によってこれらの統治を行ったことを示している。当時の情勢について『賢者喜宴』には、

shar phyogs rgya mtsho'i bar du mnga' mdzad de / rgya nag rje bskos lo yi ming la sogs /  
bod ltar bya ba'i 'ja' sa chen po bsgrags //

（吐蕃）所轄，東極大海。擁立唐王・改元等事，皆依其意，頒詔而行。

とある<sup>[35]</sup>。漢文史籍によれば、吐蕃は唐の門下侍中苗晋卿が家で病臥していたところを大人数で脅迫しているが、苗晋卿は吐蕃に協力しなかった<sup>[36]</sup>。李方桂氏は、『雪碑』南面第63-64行の rGya rje'i nang blon ['Bye'u Ts] in keng を「唐相苗晋卿」とされている<sup>[37]</sup>。『資治通鑑』には「吐蕃既立広武王承宏，欲掠城中士・女・百工，整衆帰国」とあり、広武王擁立後に吐蕃が長安の人的資源を略奪しようとしたが、唐の軍隊や民衆は巧みに疑兵を配して対抗したことが記されている。そして、吐蕃の退却する様子については「稍稍引軍去」・「庚寅，悉衆遁去」と記されている<sup>[38]</sup>。このことから、吐蕃は長安を占拠した当初、吐蕃のコントロールを受けた李氏の長期政権を樹立する計画だったのではないかと推察される。王忠氏は、広武王承宏は代宗が長安を取り戻した後に不問に処されているので、吐蕃と通謀したのではないと考えられている<sup>[39]</sup>。吐蕃人の意図と広武王の処遇は非常に興味深い研究テーマといえる。

吐蕃はなぜ傀儡の皇帝を擁立したのか、吐蕃の帝国体制の視点から考えてみたい。吐蕃は新たに征服した部族や政権に対して、元来の行政体系を維持し、吐蕃の支配下とすることが

多かった。例えば吐谷渾（'A zha 「阿豺」）は672年以降吐蕃に服属した。その後、吐谷渾の部落はほぼ消滅し、軍の糧食や装備は吐蕃から派遣された者の管理を受けた。敦煌文書PT 1185号『吐谷渾故地軍需調拔文書』（689-694年）第14-19行からは、吐谷渾の軍政は吐蕃大使（Nang rje po）と吐蕃の擁立した吐谷渾王（'A zha rjes）の統制を受けていたことがわかる。

また790年、796年～842年に吐蕃が于闐（Li yul）を統治した期間にも同様の状況が見られる。敦煌文書PT 1089号『吐蕃職官表状』第22-24行を見ると、吐蕃統治下では于闐王（Li rje）が王号（rgyal mtshan）と王法（rgyal chos）を保持し、実権は吐蕃大使（Nang rje po）が握っていたことが分かる。したがって、吐蕃の唐における「立新君」（rje gsar du bcug）は、吐蕃が新たに占領した地で用いた慣用的な統治方式であったと言える。範文瀾氏が述べられるように、763年の長安占拠は唐の国力衰退と吐蕃の国力の限界といった状況が凝縮されたものであった<sup>[40]</sup>。吐谷渾・于闐等に比べて、唐の領域は広大で政治状況も複雑であった。長安で孤立した吐蕃はその軍事力を活用することが出来なかったのである。

#### 注

- [1] 佐藤長『古代チベット史研究』巻下、(同朋舎、1977年)、523-525頁。
- [2] 李方桂「馬重英考」1956年、「藏文 sTag sgra klu khong 考」1983年。丁邦新主編『李方桂全集 1 漢藏語論文集』清華大学出版社、2012年、375-380頁、528-532頁。
- [3] 劉昫等『旧唐書』巻196、吐蕃伝上、中華書局、1975年、5237頁。
- [4] H.E. Richardson, *Ancient Historical Edicts at Lhasa, and the Mu tsung - Khri gtsug lde brtsan Treaty of A.D. 821-822 from the Inscription at Lhasa*, London: Royal Asiatic Society, 1952, p. 33; idem, *A Corpus of Early Tibetan Inscriptions*, Hertford: Royal Asiatic Society, 1985, p. 23.
- [5] 李方桂、『藏文 sTag sgra klu khong 考』、529頁。
- [6] 林冠群「唐代吐蕃の相制」、『唐代吐蕃史論集』中国藏学出版社、2006年。
- [7] G. Uray, "Khrom: Administrative Units of the Tibetan Empire in the 7-9th Centuries", Michael Aris & Aung San Suu Kyi eds., *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies*, Oxford 1979, Westminster: Aris and Phillips Ltd., 1980, pp. 311, 313.
- [8] B. Dotson, *The Old Tibetan Annals: An Annotated Translation of Tibet's First History, with an Annotated Cartographical Documentation by G. Hazod*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2009年、128頁。
- [9] 王堯『吐蕃金石録』文物出版社、1982年、88頁（考釋12）、90-91頁（考釋30）。
- [10] 黄布凡・馬徳『敦煌藏文吐蕃史文献譯注』甘肅教育出版社、2000年、101-102頁（箋証55-2）、121-122頁（箋証111-5）。
- [11] 石泰安 (R.A. Stein) 『漢藏走廊古部族』 (Les Tribus Anciennes des Marches Sino-Tibétaines) 1959年、耿昇訳、中国藏学出版社、2013年、43-44頁。
- [12] 石川巖「吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について」『日本西藏学会々報』第49号、2003年、40-42頁。

- [13] 『旧唐書』卷196, 吐蕃伝上, 5239-5240頁。王欽若等『冊府元龜』（北京, 中華書局, 1960年）卷987, 外臣部・征討, 11588頁。
- [14] 『旧唐書』卷120, 郭子儀伝, 3464頁。
- [15] 李方桂『馬重英考』, 378頁。『藏文 sTag sgra klu khong 考』, 529頁。
- [16] 欧陽修・宋祁『新唐書』卷216, 吐蕃伝下, 中華書局, 1975年, 6092頁。
- [17] 李方桂, 前掲書, 379-380頁。
- [18] 林冠群『瑪祥仲巴傑与恩蘭達札路恭——吐蕃仏教法統建立前的政教紛争』『唐代吐蕃史論集』中国藏学出版社, 2006年, 332頁, 336頁。
- [19] 德吉 (bDe skyid) 『巴協汇编』 (rBa bzhed phyogs bsgrigs) 民族出版社, 2009年, 87頁。
- [20] Pasang Wangdu & H. Diemberger, dBa' bzhed: The Royal Edict Concerning the Bringing of Buddhism's Doctrine to Tibet, Translation and Facsimile Edition, Vienna: The Austrian Academy of Science and the Tibetan Academy of Social Sciences, 2000年, 35-36頁。
- [21] 『新唐書』卷216, 吐蕃伝上, 6073頁。
- [22] 佐藤長, 前掲書, 卷下, 523-526頁。
- [23] 『旧唐書』卷196, 吐蕃伝上, 5236-5237頁。『新唐書』卷216, 吐蕃伝上, 6087頁。
- [24] 西田龍雄『西番館譯語の研究 チベット言語学序説』松香堂, 1970年, 109頁。
- [25] 王忠『新唐書吐蕃伝箋証』科学出版社, 1958年, 89頁。
- [26] 司馬光『資治通鑑』中華書局, 1956年, 卷223, 唐紀, 代宗広徳元年, 7270-7271頁。
- [27] 李方桂, 『藏文 sTag sgra klu khong 考』530頁。Fang Kuei Li & W. South Coblin, A Study of the Old Tibetan Inscriptions, Taipei: Institute of History and Philology, Academia Sinica, 1987年, 162-163頁。
- [28] G. Uray, "The Location of Khar-can and Leñ-ču of the Old Tibetan Sources", A. Róna-Tas ed., Varia Eurasiatica: Festschrift für Professor A. Róna-Tas, Szeged: Department of Altaic Studies, 1991年, 195-227頁。
- [29] 『資治通鑑』卷223, 唐紀, 代宗広徳元年, 7269-7270頁。
- [30] 『冊府元龜』卷358, 将師部, 立功, 4248頁。
- [31] 李林甫等, 陳仲夫点校『唐六典』中華書局, 1992年, 卷19, 司農寺, 529頁。
- [32] 『新唐書』卷216, 吐蕃伝下, 6094頁。
- [33] 陸贄『賜吐蕃将書』, 董誥等編『全唐文』中華書局, 1983年, 卷464, 4739頁。
- [34] 『旧唐書』卷196, 吐蕃伝上, 5237頁。『新唐書』卷216, 吐蕃伝上, 6088頁。
- [35] 『賢者喜宴』, 198頁。
- [36] 『冊府元龜』, 卷315, 宰輔部, 公忠, 3427頁。
- [37] 李方桂『藏文 sTag sgra klu khong 考』, 531頁
- [38] 『資治通鑑』卷223, 唐紀, 代宗広徳元年, 7272-7273頁。
- [39] 王忠, 前掲書, 89頁。
- [40] 範文瀾『中国通史簡編』第3編第2冊, 人民出版社, 1965年, 467頁。

(ニン ショウハ 復旦大学中国歴史地理研究所講師)  
 (こうの たけひこ 学習院大学国際研究教育機構 PD 共同研究員)